

二次林

は
いま



里地里山の中心をなす二次林は、薪や炭の材料としてすぐれているコナラ、クヌギ、アカマツなどからできています。かつての二次林はおおよそ10~30年ごとに伐採されていたため、樹木は小さく、明るい環境が広がっていました。このような二次林には、明るい林が好きなスマレ類、カタクリ、シュンラン、ツツジ類、ギフチョウなどがたくさん見られました。

ところが、燃料が新から石油やガスなどに代わり、二次林の利用・伐採がなくなると、木が大きくなってソヨゴやヒサカキなどの常緑広葉樹やササが増え、林は暗くなり、生きものが少なくなっています。

生きものにぎわいをよみがえらせるために、明るく、手入れされた二次林を作って保つことが大切です。



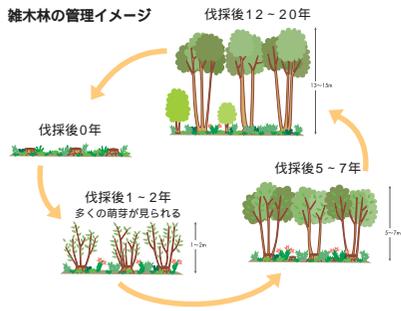
竹林が里地里山を飲みこむ

タケはタケノコが美味しいためあちこちに植えられ、大切に管理されてきました。ところが最近では、タケノコの自給率が下がり、手入れされていない竹林が増えていきます。

タケのなかでも成長の早いモウソウチクはタケノコから約1ヶ月で20メートルもの高さに達し、まわりの植物を日陰にして枯らしてしまいます。タケノコを採るなどの管理を行わなければ、竹林が1年に最大3~4メートルの割合でまわりの植生を飲みこんでいきます。増え続ける竹林は、これからの里地里山管理の上で最大の問題点かもしれません。



雑木林の管理イメージ



水田・ため池

は
いま



水が豊かな日本では、いたるところに水田が作られ、水田とそのまわりのため池、水路などは、カエルやサンショウウオ、メダカやトンボ、多くの水草にとって重要なすみかになっていました。しかし、減反にともない水田の面積は徐々に少なくなっています。とくに、生きものが多い谷間の水田は真っ先に消えていきました。また、ため池や水路の岸辺がコンクリート護岸に変わることによって、生きものの姿がめっきり少なくなりました。

最近では、生きものが多い水田、ため池を取り戻すために、整備のやり方にさまざまな工夫がなされています。



ため池の管理イメージ



水辺の外来種問題

人によって他の地域から持ち込まれた生きものは「外来種」と呼ばれ、世界中で問題になっています。里地里山の水辺では、ブラックバス、ブルーギル、アメリカザリガニ、ウシガエルなどの外来種が広がり、もともと日本にいた生きものを食べたりして生態系に深刻な影響をもたらしています。

ひとたび持ち込まれた外来種を取り除くのはとてもたいへんです。まだ侵入していないところには、絶対に持ち込まないことが大切です。



アメリカザリガニ



ブルーギル



シャーブゲンゴロウモドキ ハッチョウトンボ ダイサギ